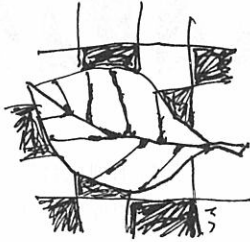


リサイクル社会と景観創造



進 士 五十八

(東京農業大学学長)

1. はじめに

わが東京農大は110年前、榎本武揚によって創始、初代学長横井時敬によって「実学主義」教育による“農”の総合大学としての歩をすすめてきた。

20世紀文明を構築した原動力は、“工”であり、近代科学の方法論は“分化”の思想であった。その成果として高度工業文明社会が実現した一方で、地球レベルの環境問題や都市問題を惹起してしまった。この100年間の人口増が4倍であったのに、経済20倍、エネルギー消費25倍、というエネルギー過剰消費社会となってしまったこと、その基盤として人口の一極集中型都市を地球的スケールで普及してしまったことが、その原因であった。

21世紀の社会システムとして、環境基本法と環境基本計画が提案する「循環」「共生」「参加」「国際的取組み」の一層の推進と確立がもたれるのはいうまでもない。

そのためには、“農”の思想、“総合化”の方法が極めて重要だというのが私の考えである。「循環」「共生」を基調として数千年の人間史を育んできたのが“農業”であった。「参加」も、“結(ゆい)”など、地域共同体システムを思い出せばもともと“農”のこころであったことが

わかる。

循環型社会をイメージするのに最も近いのは“農”の思想と方法である。わが東京農大も“農”の原点に立ち戻って、環境の世紀をリードすべく、市民社会の現実的要請に応じて問題解決に取り組んでいる。

既に本学では、多くの姉妹大学と協力して「生態系保全型農業システム」の確立に向けた研究プロジェクトを推進しているし、「緑化樹木の剪定整枝循環利用技術」クリーンエネルギー、有機物の循環技術などに関する多彩な研究プロジェクトを展開している。関係各位の積極的な参画を得て、より社会的に有用な成果を、より体系的に提供していければと願っている。

2. 生ごみの庭……私的で小さな試み

我が家の小さな庭は、それでも現代の名園だと思っている。人間の歴史と共に名園、名庭の歴史はある。ただ、造園家としての私の考えでは、その時代その社会の要請に応えない庭園は名園とはいえない。従って、現代社会の要請のひとつ—リサイクル・循環をテーマとした我が家の庭は、小なりといえども現代の名園ではないか、と思うのである。

私は結婚と同時に小田急の南林間という昭和初期の林間都市構想の町に移り住んだ。そして数年

で、近くの樹林地を造成した分譲地に引っ越すことにした。南側に児童公園が隣接する宅地で、家内は日照のすばらしさを、子供たちはタイヤ公園の真横だと大歓迎、私は造園家として、終日我が家から公園ウォッチングが可能な好条件だということ、みんなの意見が一致したからである。

ところがこの家の造成がしつかりしすぎていて、前の家から移植した中木のヤマボウシも、長女の記念樹のウメも次女のカリンも、庭の土が固くて穴を掘るのがやっとであった。林を伐って宅盤造成するとき、徹底的に転圧されていたからである。引越し間もない頃、ちょっと雨が降ると庭に水が溜まって池ができてしまう。なかなか水が浸み込まないのである。

樹木を植えるのにスコップでは刃が立たない。ツルハシはないし必死でいろんなことを試みた。生ごみを埋めて、土を柔らかくしよう。そう決心して、一家4人の生ごみはすべて、わずか10坪ほどの小さな庭に還元してきた。そして早23年が過ぎていく。

有機物の土壌改良効果は、教科書的には理解していた。しかし、数年たっただけで我が庭は見違えるように自然らしくなった。庭と公園の境界柵に沿ってヒイラギモクセイとサザンカとトウネズミモチの生垣を植えた。これだけは当時のまま、隣家との境界は、生ごみからの実生のビワを列植した。生垣風に仕立てたつもりが高くなり、隣家の軒を傷めないか、気になるほどに育ってしまった。近年たくさんのビワの実がなり、野鳥にごちそうしている。

古株のナツミカンもたくさんの実をつけ、来訪者がマーマレードを造りたいと持ってゆく。私の原風景論の観点から4、5本の柿の木も狭い庭の空をおおって、今青々した実を重そうにつけている。林床にはヤブキタ茶の株、ドウダン、ツツジ、ムベ、センリョウ、マンリョウが窮屈そうに生えている。

庭の平地に片端から生ごみを埋めてゆく。もとの場所に穴を掘るころには、前に埋めた生ごみは土になっている。うっかり腐っている最中の場所を掘ったりすると強烈な悪臭を放つ。しかしこれに土を混ぜると早く土に戻るようだ。生ごみ埋立て作業は家内が殆どやってくれているが、私も時には穴を掘ってきた。今でも時に固い場所が見つかるから、柔らかくなった場所の土との比較が可能になる。

何年か前に市役所がプラスチックのコンポスターをすすめたので、2個購入し使ってみた。しかしコンポスターでは、ウジばかりわいて土になるのがおそく、やっぱり直接庭に埋め方式に戻した。菌をいれるとか、土を混ぜるとか、我が家の庭木も含めて、一切自然放置型であるので、何もしない。改めて、自然主義というほど大袈裟ということではなく、単なる手抜きだが、それはそれで結構うまくいっている。

何と、生ごみから芽がでたジャガイモが花を咲かせ、こつぶだが小芋をつける。いま庭からテラスまでをおおっているのは、やはり生ごみからのカボチャで、毎日黄色い可憐な花をつける。小さいが立派に実も熟している。家内は墨絵に描きたいとさえいっている。

子供たちが小さいときには、紫の小花を見せてこれがジャガイモの花だよと、環境教育をしたこともある。ごみから芽が出て、また子どもをつくる。この庭の観察から私は、自然の生命力の偉大さを実感した。

クルト・ハーンの「大人は、子供に大人の考えをおしつけてはならないが、体験することはおしつけるべきだ」との言葉の大切さをかみしめたいものだ。自然の偉大さも、目で見て、触れて、はじめて納得することの重要性を、そして造園家として、ほんとうに“庭”や“緑”や“野鳥”のいる空間が不可欠であることを、この小さな10坪の庭が私に教えてくれたのである。

3. 造園の中のリサイクル—美の創造

造園、すなわち庭や公園を造るという行為は大変長い歴史をもつ。ある空間を囲いこんで、その中に山を築き池を穿ち木を植え花を咲かせる。これが、人間の理想環境・Gardenである。gardenはgan（囲い、防衛する）とeden（悦び、愉しみ）の合成語。この庭園の造成法の基本は、築山と池泉、すなわち“盛土量”と“切土量”はイコールだということである。自分の敷地内でプラス・マイナス・ゼロ。外部に影響を与えないということである。

日本庭園の特質の一つは石組みだといわれる。日本では、自然界からいろいろな形の自然石をとってきて、これを組み合わせて、例えば三尊石組をつくる。石を3つ組んで阿弥陀三尊や薬師三尊を象徴するのである。この石は何の加工もしない。自然のままである。廃棄物ゼロ。次いで、この石は、他に運ばれて何度も活用される。最も有名な庭石は、京都醍醐三宝院の藤戸石。いろんな形と時代の石灯籠もそうである。いろんな庭に使いまわされる。むしろ使い廻されるほど付加価値がついて値打ちがあがる。庭園の石灯籠、飛石、蹲（つくばい）などは売立で、と称してセリにかけられリユースされる。庭木についても同様、庭園材料は“循環再利用”の中で価値が高められていったのである。

本格的なリサイクルといえば、現代の公開造園での試みがある。愛媛県南予レクリエーション都市の中核施設として「南楽園」が造られた。作家は伊藤邦衛氏。氏は、海辺の湿地帯に、残土を運び島をつくる。その護岸の石組資材の自然石8,000トンは県内の土木現場、トンネル工事や道路工事からの発生岩石を活用したものである。一般に土木現場の発生岩石は、不等沈下の原因を起こさぬため、細かく砕いて埋め立てるのがふつう。石組のセンスがあれば、それを止めて、石を選び形を

整えることができるのである。

もともと千利休の創始した茶の湯、そして茶庭における基本的態度としてもリサイクル、リユースの思想が流れていた。そのさらに前の造園家夢窓疎石ら禅僧の作庭法には、「残山剩水」（ざんざんじょすい）という中国の水墨画の手法があった。残り物の山や剩り物の水で、ひとつの世界を創出しようという手法であった。

関東大震災の復興事業で、横浜市の山下公園が造成された。当時の横浜にはレンガ造や石造の建物も多く、これが地震で倒壊。その残土の始末に、海岸を埋め公園を造ることにしたのである。いまでは、横浜一美しい場所とされる山下公園と周辺の緑の町並みは、いわばゴミの上に建設されたのである。土をのせ、樹木を植えたことで、美しい景観へと成長したのである。何もない海岸に緑のプロムナードができたのである。ドイツの大都市ミュンヘンには、オリンピック公園の人工の丘がある。これもまた残土活用の景観創造である。ゴミの処分のために、内陸の谷戸地形を埋めることが多いが、ひときわ高く盛土することで、遠くからもランドマークとして眺められる土の造形も悪くない。先頃、韓国ソウルの空港への道すがら大きな丘が続くのを見た。これもゴミの山だったのだ。きっとハードなコンクリートの超高層ビルが林立する足元のオープンスペースでは、特にこの柔らかなマウンド・フォームがメカニカルな都市イメージを緩和してくれる。

ゴミを始末すべき課題としてのみ取り組むか。資源として再利用するか。さらにもう一步進んで、風景づくりに仕上げようとするか。それは人間の知恵次第である。

中国杭州に西湖という湖がある。三方山で囲まれ、豪雨でその土砂が流入すると湖底が浅くなり、杭州の町は洪水常襲地帯となった。時の知事白樂天、さらに遅れて蘇東坡は治水事業として、湖底の泥を浚渫し、これで湖面の真中に堤を築いた。

今ではバスも走っている広幅員の堤である。護岸には石組み、楊柳というシダレヤナギを列植修景した。処理に淡水漁業の舟が往来するためのアーチ橋も架けた。樹叢といい橋梁といい、よい画題となり詩題となって、西湖風景はその美景+ポイントがワンセットで描かれ「西湖十景」として世界的景勝地へと発展、有名になってゆく。白堤、蘇堤。日本では、西湖堤の名が今に伝えられているのである。

人間の知恵は、こうして浚渫土をして世界的景勝地にまで変えた。いわば「ゴミ」は「美」にたかめられたのである。

生ゴミも土に戻り、嬉々とした生命の美を育む。アブラハム・マズローの人間の欲求段階説では、私たち人間の究極は“美の追求”とか。リユースもリサイクルもひとつの手段。目指すゴールは“美の創造”“美しく生きる”ことではないだろうか。

少なくとも、部分的課題の解決の努力を続けつつも、その向こうにある人間生存の目的である“美”を忘れないで生きたいものである。

(第5回生ごみリサイクル全国交流集会論文集
に加筆 2000年11月)